「本を読むことは好きです」

2021 年 11 月 30 日

静岡県労働組合評議会　事務局長　　松川　功

本を読むことは好きです。時代小説は好きで、長谷川卓さんの「戻り舟同心」シリーズはお気に入りです。主人公　二ッ森伝次郎（にたつもりでんじろう）は、一旦、同心の家督を息子に譲り、10 年隠居生活をする 68 歳の年寄りです。隠居しても、元同心としての顔を生かし近所の困りごと相談の応じ、忙しく飛び回っていました。「息子や嫁に気を遣う程耄碌（もうろく）はしちゃいねえ。」と伝次郎は考えていました。その伝次郎が町奉行から直々に永尋（ながたずね）、言わば迷宮入りの事件解決のために指名され同心に戻ります。事件解決のため、同じく隠居していた元同心を集め、手下も隠居していた岡っ引を呼び戻し、チームを作り、奉行所内には、専用の詰所を建てさせます。早速、江戸の町を見回り、見覚えのある悪人を見つけ、そこから盗賊一味を捕まえます。こうした活躍に伝次郎の孫や岡っ引の孫娘もチームに加わり、年寄りと若者が迷宮入り事件を一つずつ解決していくのです。

伝次郎は薄味の嫁の食事でなく、行きつけの料亭の濃い味が好み。午後 10 時（夜四ツ）に帰宅すると「遅い、とまた文句を言われるのか。新治郎（息子）の声が、耳朶に甦った。あの野郎、誰のお陰で大きくなったのか、忘れたんじゃねえのか。」と考える。でも伝次郎は、その思いを口はしないのです。

経験知識ともに息子世代に勝るが、一方で体は段々と動かなくなる。動かなくなることも認めたくないと思うが、動かない。意地をはる伝次郎。新治郎は、そんな父の身体を心配しながらも、同心としての「悪い奴は許さない」の姿の父を尊敬する。

僕は、小説を読むとき、その主人公に共感できるか、その物語が解決できるのかが気になります。戻り舟同心の伝次郎には、大いに共感できるし、とにかく物語は解決する。僕は、伝次郎ほど頑固ではないが、その要素はあります。

このシリーズがもっと続くことを願っていましたが、残念ながら作者の長谷川卓さんは昨年 11 月に亡くなってしまいました。戻り舟同心シリーズが最後の作品となりました。長谷川卓さんは清水区に住み、静岡県内の様々な土地が小説に登場しました。「七ツ」という名の人物を登場させています。清水区の「七ツ新屋」の地名から名付けたと長谷川卓さんは説明しています。まだ、72 歳でした。戻り舟同心のほか、もっと読みたかったな。